

OKADA-ROOM Vol.16

陽光の下で描く

会期 2020年2月29日（土）～5月31日（日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。

1897（明治30）年から1901（明治34）年にかけてパリで油彩画を学んだ岡田三郎助は、師ラファエル・コランについて外光を取り入れた明るい色彩表現を会得しました。そこで得た学びは、のちに花開く岡田の温雅な色彩感覚の一端をなすこととなります。この岡田の色感は人物画のみならず、屋外の光景を描いた作品でとりわけ豊かに発揮されました。

今回のOKADA-ROOMでは、岡田三郎助をはじめ、洋画家たちが手掛けた風景画の名品を紹介します。春から初夏にかけての瑞々しい野山の景や、留学や旅行で遊んだ外国の風景など、画家たちが現地で味わった光や風、空気を想像しながらお楽しみください。

※★印はOKADA-ROOM初公開作品

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	夕陽 ★	Setting Sun	岡田三郎助	1894（明治27）	23.6×32.8	油彩・板	館蔵

画塾「大幸館」を卒業して間もない1894（明治27）年、岡田は同郷で遠縁の久米桂一郎を介して初めて黒田清輝を知り、その明るい画風に大きく感化される。本作はまさにその頃に描かれた作品で、夕日を浴びる湖面にみられる繊細な色彩などに、黒田らから受けた直接的な影響が見て取れる。この出会いをきっかけとして、岡田はのちフランスに留学し、黒田の師・コランのもとで明るい外光表現を探求していくこととなる。その意味で、小品ながら重要な時期の作品といえるであろう。

なお、岡田は白馬会の第一回展に同名の作品を出品していることが知られており、本作が当該作品である可能性がある。

2	初夏風景 ★	Early Summer	岡田三郎助	不詳	32.3×44.3	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----------	---------------	---------------------	--------------	-----------	------------------	-----------------	----------------

制作年の明記はないが、明治30年代頃の岡田作品にみられる淡い色彩が用いられている。土がむき出しになった地面、乾燥した空気感から、ヨーロッパで描かれた作品である可能性もある。入道雲の躍動的な形態、木々のやわらかな緑色など、スケッチ的な作品ながら初夏らしいすがすがしさを感じさせる一枚。

3	コローの池 ★	Corot's Pond	岡田三郎助	1931(昭和6)	25.0×43.5	岩絵具・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----------	----------------	---------------------	--------------	------------------	------------------	------------------	----------------

No.4と同じ湖に取材した作品だが、こちらは日本の伝統的な画材である岩絵具で描かれている。同一の対象を異なる画材で描き、表現の違いを試みたのであろう。湖面には銀泥、右下の土手部分には金泥が使われており、その鈍い輝きは、コローの得意とした銀灰色の風景表現を思い起こさせる。

額は、岡田が蒐集品である古裂を用い特注で作った品である。作品と古裂の意匠との取り合わせも楽しんだのであろう（《丹霞郷》の額も、同様に裂を利用したもの）。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
4	コローの池	Corot's Pond	岡田三郎助	1930(昭和5)頃	33.0×24.0	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）

岡田からさかのぼること約100年前、バルビゾン派の風景画家、カミーユ・コロー（1796-1875）はパリ近郊のヴィル＝ダヴレーに別荘を構え、湖を題材に多くの風景画を制作した。岡田はヨーロッパ旅行中にコローの愛したこの地に滞在し、湖畔で制作を行った。柔らかな配色とうねる筆致が特徴的である。

5	フローレンス風景	Landscape of Florence	岡田三郎助	1930（昭和5）	22.0×28.1	水性絵具・絹・板	館蔵
----------	-----------------	------------------------------	--------------	------------------	------------------	-----------------	-----------

二度目のヨーロッパの旅の途上、イタリアのフィレンツェ（フローレンス）で描かれた作品。旅に同行した画家、大橋了介の回想によると、岡田はアルノ川に面したホテルの窓から、現在も観光地として名高いこのヴェッキオ橋をスケッチしたという。建物同士の重なり of 描写やカラフルな色彩が際立ち、軽やかかつ装飾的な画面に仕上がっている。フィレンツェの街並みのリズムの面白さに、岡田は惹かれたようだ。

このスケッチをもとに帰国後描いたのが本作であろう。絹本の上に水性絵具で描いた珍しい作例である。

6	丹霞郷	Tanka-kyo	岡田三郎助	1933（昭和8）	53.0×65.1	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----------	------------	------------------	--------------	------------------	------------------	-----------------	----------------

1933（昭和8）年5月、岡田をはじめとする10人の画家、美術評論家たちが長野県へ招かれた。彼らは長野市へ向かう途中、中郷村平出（現・飯綱町平出）を通過した際に桃の花が美しい果樹園を見出し、賛美して「丹霞郷」と名付けた。

岡田はしばしば長野へ写生旅行に赴き、丹霞郷へは1937（昭和12）年までで5回ほど訪れたという。

7	富士山（三保にて）	Mt.Fuji (view from Miho)	岡田三郎助	1920（大正9）	137.3 × 197.5	油彩・カンヴァス	館蔵
----------	------------------	---------------------------------	--------------	------------------	----------------------	-----------------	-----------

三保の松原から富士を望む風景である。明け方の光が雄大な富士山を照らす風景が、透明感のある色彩で描かれている。朝日に輝く雪を被った山頂、グラデーションをなす空や山肌の色彩が優美であり、現存する岡田の風景画で最大という作品の大きさにも関わらず、画面全体の調和が保たれている。

富士山は霊峰とされ、古くから描かれてきたが、近代には国家を象徴するモチーフとして描かれるようになっていった。

8	新緑 ★	Fresh Green	岡田三郎助	1929（昭和4）	37.9×45.4	岩絵具・絹	館蔵
----------	-------------	--------------------	--------------	------------------	------------------	--------------	-----------

岡田は1912（明治45）年頃から岩絵具を使いはじめ、しばしば作品を岩絵具で描いた。例えば1928（昭和3）年に昭和天皇の即位を祝して描かれ、皇室に献上された作品《楊柳》は、柳の木のある水辺の風景を岩絵具で写した作品である。その翌年に描かれた本作では、《楊柳》の謹厳な描写とは異なり、素早く自由闊達な描写が印象的だ。

9	風景	Landscape	岡田三郎助	1919（大正8）	40.8×26.6	油彩・カンヴァス	館蔵
----------	-----------	------------------	--------------	------------------	------------------	-----------------	-----------

東京渋谷伊達跡（現東京都渋谷区恵比寿）にあった、岡田の居宅兼アトリエの脇の小道とバラのアーチを描いた作品。岡田は自邸の庭に多くの花や植物を植えていたが、バラをことのほか愛した。アトリエの入口にはバラのアーチをしつらえ、アーチは岡田邸のシンボルの存在として客人を出迎えた。また岡田の静物画の多くにもバラは描かれており、《少女読書》（当館蔵）のように、女性像の手元や背景にバラの花をとりあわせた作品も多く残されている。

なお現在、岡田のアトリエは当館東側に移設・復原され、岡田の好んだ植物を植えた庭とともに一般公開されている。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
10	子持山	Mt.Komochi	岡田三郎助	1934（昭和 9）	23.8×33.0	油彩・カンヴァスボード	館蔵

子持山は群馬県沼田市の南西に位置し、景勝地として名高い。本作は岡田宅の近所に在住していた西嶋先生なる人物が転居する際、岡田が餞別として贈ったものだという。この年の12月、岡田は帝室技芸員の一人に任ぜられる栄誉を得る。66歳のことであった。

11	^{そうそうえん} 淙々園にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935（昭和 10）	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----	-------------------------	------------	-------	-------------	-----------	----------	---------

滞在していた旅館から、《伊豆山風景》（No.12）と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。読書にふける姿は、柔和ながら凜とした雰囲気を漂わせる。

12	伊豆山風景	Landscape of Izusan	岡田三郎助	1935（昭和 10）	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-------	---------------------	-------	-------------	------------	----------	----

1935（昭和 10）年、岡田は伊豆・熱海を訪れ、本作や《淙々園にて》などの作品を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。熱海には1895（明治 28）年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、多くの文化人や観光客を集めていた。

13	日だまり（くつつろぎ）	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896（明治 29）	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-------------	-----------------------	-----------	-------------	-----------	----------	----

岡田は1897（明治 30）年から文部省留学生としてフランスへ渡り、黒田や久米の師であるラファエル・コランのもとで学んだ。本作はコランが《くつつろぎ》（Intimité）というタイトルでパリのサロンに出品した作品である。戸外で、白い服を着た女性が読書する様子が描かれる。木々の緑や、木漏れ日を受けた女性の肌やスカートの繊りなす繊細な色合いが美しい。陽光があたって輝く明るい緑や白色のコントラストは、この時期のコランが特に得意とした表現であった。

ラファエル・コラン（1850～1916）
フランス・アカデミーの画家。アカデミックな描写に外光表現を取り入れた、穏健で上品な女性像を得意とした。

コランの薫陶を受けた黒田清輝や久米桂一郎は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらすことになった。日本の美術品や花々を愛した寡黙な人物で、弟子たちは彼を父のように慕ったという。

4	子供のいる風景	Scene with a Child	久米桂一郎	1895（明治 28）	45.3×60.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	---------	--------------------	-------	-------------	-----------	----------	----

フランス留学から帰国して2年後、29歳の久米が京都を旅行した際に描いた作品。木々の下にたたずむ子どもは、何かの実を食べている最中だろうか。葉の間から差す光や足元の木洩れ日を点描的に表現し、鮮やかな陽光を捉えることに心を砕いている様子がうかがえる。一方、影は柔らかく平坦なタッチで描き分けられている。

久米桂一郎の「子供のいる風景」の複製。1895年、明治28年、東京、東京美術学校。

久米桂一郎（くめ・けいいちろう、1866～1934）

佐賀に生まれる。父は歴史学者の久米邦武。岡田三郎助とは母方の遠縁にあたり、生家ははず向かいであった。1886（明治 19）年に渡仏し、ラファエル・コラン門下に入り黒田清輝を知る。帰国後は黒田と画塾を開き、白馬会結成に携わった。岡田と帰国後間もない黒田を引き合わせたのは久米であり、岡田の画風の一大転換は彼によってもたらされたといえる。東京美術学校の西洋画科では、解剖学や西洋考古学などの授業を担当。その後画作からは遠ざかり、美術教育者として活躍した。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
15	英国風景	Landscape of England	高木背水	1911（明治 44）	40.3×33.8	油彩・カンヴァス	館蔵

サインから、本作は英国留学中にラフトン（Loughton）で描かれたことが分かる。ラフトンはイングランド東部に位置するエセックス州の町である。高木は英国留学中に、現地で活動していた日本人画家・石橋和訓（いしばし・わくん）の紹介でレナード・ヒル（本業は生理学者・医師）に師事したが、ヒルは1902年からラフトンに住んでいた。恐らくはその関連から、ラフトンの風景を描いたのであろう。

けぶるような筆致で、緑ゆたかで湿潤な景色が描き出されている。

高木背水の「英国風景」の複製。1911年、明治44年、東京、東京美術学校。

高木 背水（たかぎ・はいすい、1877～1943）

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で単身上京。1893（明治 26）年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。苦学を重ねながらアメリカ・イギリスでも学んだ。雅号「背水」は「画家として“背水の陣”で精進する」という決意を示す。デッサンの名手であり、明治天皇の肖像画を描いたことで知られる。大正 4 年～末年の間は朝鮮にアトリエを構え、現地の美術の振興に尽力した。

16	自宅の庭 ★	Home Garden	小代為重	昭和初期	33.0×23.9	油彩・板	館蔵
----	--------	-------------	------	------	-----------	------	----

白馬会の創設メンバーとして岡田らにも多大な影響を与えた小代だが、1935（明治 45）年頃からは展覧会から遠ざかり、東京電信学校や青山学院などで教鞭を執りながら、身の周りの何気ない風景を小品に残した。本作もそのような作品のひとつで、世田谷の自宅の庭の一角を描いている。

色鮮やかに花をつけたツツジの木々はよく丹精されていることが見て取れ、作者の植物に対する温かな眼差しも感じられる一作である。

小代為重の「自宅の庭」の複製。昭和初期、東京、東京美術学校。

小代 為重（しょうだい・ためしげ、1861-1951）

佐賀市に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行（ひゃくたけ・かねゆき）から油彩を学び、1885（明治 18）年からは工部大学で建築装飾を教える。油彩画を学ぼうと決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦（そやま・さちひこ）の画塾を紹介するなどの援助をしている。明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図の助教授を務めた。

17	巴里郊外の春★	Spring of Suburbs of Paris	御厨純一	1928（昭和 3）	32.9×52.3	油彩・カンヴァス	館蔵
----	---------	----------------------------	------	------------	-----------	----------	----

御厨は1926（大正 15）年から1928（昭和 3）年までの間、パリに留学し、サロン・ドートンヌなどに出品しながら絵画修行を行った。本作は滞欧最後の年、早春のパリ郊外の街並みを描写した作品。桃色のつばみをほころばせる木や、赤い屋根のリズム感ある描写などに、春を待ち望む街の雰囲気があらわれているようだ。

御厨純一の「巴里郊外の春」の複製。1928年、昭和3年、東京、東京美術学校。

御厨 純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948）

佐賀市高木町に生まれる。1906（明治 39）年上京、白馬会第二研究所を経て東京美術学校で学ぶ。同校の卒業生と「四十年会」などの洋画の親睦団体を立ち上げる。1926（大正 15）年、フランスに留学、ヨーロッパを周遊しながら現地の風景などを描いた。第二次大戦中は海軍従軍画家として戦争画を手掛けている。力強い線と量感豊かな描写に特色がある。

御厨純一の「巴里郊外の春」の複製。1928年、昭和3年、東京、東京美術学校。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法(本紙・cm)	材質	所蔵
18	梅 ★	Plum Tree	北島浅一	1941~42(昭和15~16)頃	53.4×65.3	油彩・カンヴァス	館蔵

青空に枝を伸ばし、満開の花をつける老梅。北島の特色のひとつである速い筆致が、梅の枝の生命力みなぎる表現によく活かされている。

北島は、1935(明治45)年頃から山海の風景を盛んに画題とするようになる。なかでも自身の晩年でもあり太平洋戦争が本格化する1941~42(昭和15~16)年頃は、奥多摩の吉野梅林などに滞在し梅の木を多く描いた。戦火を避け、自然のなかに画境を求めようとしたのかもしれない。

北島 浅一 (きたじま・あさいち、1887-1948)

小城市に生まれる。本名の「朝一」は、朝一番に生まれたことに由来する。白馬会第二研究所を経て東京美術学校へ入学。同校では御厨純一や萬鉄五郎が同期であった。大正8(1919)年から3年間フランスに留学、アカデミー・コラロッシに学ぶ。1921(大正10)年、《踊り場》がサロン・ドートンヌに入選。帰国後は帝展・文展を中心に活躍する。速い筆致で洒脱な作品を多く残した。

19	朝日	Sunrise	青木繁	1910(明治43)	72.9×115.2	油彩・カンヴァス	小城高等学校同窓会黄城会蔵(寄託)
----	----	---------	-----	------------	------------	----------	-------------------

大きくうねる海面に朝日が映える、青木の絶筆とされる作品である。青木は1910(明治43)年8~9月にかけて、結核の療養のため唐津を訪れた。本作はその際に唐津の海に着想を得て描かれたもので、不同舎時代の同輩で小城中学校の教員をしていた平島信の斡旋により、同校(現:小城高等学校)に納められたと考えられる。青木の全盛期に布良で描いた海景画とは異なり、本作は不思議な静けさを帯びている。

2年余りを佐賀で過ごした青木はこの翌年、博多の病院で息を引き取った。

青木 繁 (あおき・しげる、1882-1911)

久留米市に生まれる。洋画家の森三美に学び東京美術学校(現在の東京藝術大学)に入学。1904(明治37)年、千葉の海岸で代表作《海の幸》(石橋財団アーティゾン美術館蔵)を描く。1907(明治40)年、東京勸業博覧会に《わだつみのいるこの宮》(同館蔵)を出品するも、三等賞という不本意な結果に終わり失意のなか帰郷。天草や佐賀を放浪し、28歳の若さで没した。古事記を愛読し、神話に想を得た浪漫的な作品を多く描いた。

No.	作品名・資料名	英訳	所蔵
20	鞆	trunk	岡田三郎助アトリエに伝来 館蔵
21	旅行用イーゼル	Okada's easel	岡田三郎助所用 館蔵
22	絵具箱	Okada's paintbox	岡田三郎助所用 館蔵
23	野外写生用ステッキ	Okada's stick	岡田三郎助所用 館蔵
24	ステッキ(ヘビ革)	Okada's stick (snakeskin)	岡田三郎助所用 館蔵
25	日傘	Okada's parasol	岡田三郎助所用 館蔵

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail: hakubi@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>